

風雪平野

長部日出雄

風雪平野

長部日出雄



角川書店

風雪平野



昭和五十一年十二月三十日 初版発行

著 者 長 部 日 出 雄

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見二の十三
①一〇二②東京三一九五二〇八
電話 東京（三三）七二八（大代表）

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社 宮田製本所

風雪平野

目次

序章	誕生	五
第一章	独立	三
第二章	領土	九
第三章	職人	一三
第四章	建築	一五
第五章	終焉	三五
あとがき		二七〇

装幀 葛西四雄

序章 誕生

ひとつの町は、一体どのようにして地上に生まれるのだろうか――。

津軽平野の中心に位する五所川原市の歴史は、その移り変りを、いわば端的にあらわしているといつていい。五所川原という地名が、初めて津軽の文書に出て来るのは、いまからちょうど三百三十年まえのことである。そして、それからの短い歴史は、人間の古代からの営みを、そのまま凝縮して物語っているようにおもわれるのだ。

現在の五所川原地方は、反当収量日本一を争う、見渡すかぎり広広とした水田地帯である。

いまから四百年ほどまえ……。

このあたりは渺茫とした十三潟の一部で、一面の水に覆われていた。津軽中の河川を集めて、その先端が日本海に通じている十三潟の水面は、海に注ぐ水戸口が狭かったために、大雨が降るたび、しばしば氾濫を繰返した。

大水によって岸边から削りとられた真菰は、十三潟のなかに押し流されていく。そのなかの一部は、浅瀬にへばりついて、そこに根を下ろした。岸边から削られた泥は、真菰に遮られて沈澱する。泥地

に蘆が進出する。そのあとに雑草が生えひろがってくる。こうして十三瀉は、氾濫を繰返すたびに、岸の水面は泥地になり、泥地は地面に変わっていった。

やがてそこへは、雑草のあとに人間がやって来た。

三百三十年まえ、正保二年の津軽知行高帳によれば、

——五所川原村六石二斗五升。

この石高から推定して、たぶん二、三戸の農家がこの低湿地に掘立小屋を立てて、蘆野原の開墾に乗出したものとおもわれる。またかれらが、たびたび水害と冷害に見舞われたであろうことも、想像に難くない。

真孤と蘆と雑草が十三瀉のなかに進出していくにつれて、五所川原の周囲には、喰川、平井、柏原などの小部落が出現した。

喰川という地名は、氾濫する川によって何度も喰われたところから生じたものである。が、いったん土地を得た人間は、そこから退こうとしなかった。五所川原という地名が初めて文書に記載されてから四十二年目、貞享四年の知行高帳によると――。

五所川原村二十六軒

喰川村 二十五軒

平井村 三十二軒

柏原村 十四軒

計九十七軒で、田畑は二百三町五反七畝にひろがり、石高は実に千四百九十石にふえている。これらの農家のうち三分の二は「お蔵」すなわち自作農で、残りは「水呑」といわれる小作人だった。

それから二、三十年のあいだに、これらの農家を相手にする質屋、鍛冶屋、魚屋など十二軒の商家が生まれた。しかし、十三潟のあとの蘆野原のなかに出現した四つの村は、そのまま順調に発展したわけではない。津軽全域では、死者八万、斃馬一万七千頭を出したといわれる天明年間の飢饉では、五所川原四か村も、約八百石分の土地が廢地になるという大打撃を蒙った。

愕かざるを得ないのは、その打撃のあとに示した人間の回復力というか、生命力の根強さである。

天明の大飢饉から十数年を経た寛政年間にはさらに荒野の開拓が進んで、五所川原四か村には、

——造り酒屋、古着屋、木綿屋、染屋、魚屋、豆腐屋、味噌醬油屋、煮売茶屋、干着屋、菓子屋、

飴屋、風呂屋、荒物屋、桶屋、指物師、木挽き、大工、左官……

など数十軒にのぼる商家と職人の家が現われ、なかでもその中心の五所川原村は、さながら商家の村のような賑わいを呈し始めた。

商人たちは当然のことながら、栄枯盛衰を繰返した。実りの貧しい土地にへばりつき、しかも収穫の半分以上を年貢に取上げられる百姓にとって、商人は必要な存在でもあったけれども、同時に反感と羨望の対象でもある。失敗した商人は嘲笑の的にされたが、成功者はやはり一種の英雄と見なさざ

るを得ない。五所川原村には数数の英雄が現われては消えた。人人は心のうちに敵意を秘めながらも、その英雄譚を炉辺で語り継いだ。

五所川原の村が蘆野原のうえにでき上がってから、およそ二百年ほど経った天保十二年の夏、かなり離れた金木村の農家に、嘉之^かという男の子が生まれた。

いつのころからか、子供の嘉之は、商人の出世譚を聞くことを、なによりも好むようになった。嘉之の父親は、自分の先祖を、

——かつて摂津国に住んでいた武士である。

と信じていた。かれの家に伝わる場所によれば、その先祖の武士は、石山本願寺が信長と争ったときに、願如上人の子教如が率いる本願寺内の死守派とともに戦い、敗れ去ったのちにこの本州北端の津軽の地へ逃れて来て、金木の蘆野原を開墾する百姓になったのである。

——自分の家は、武士の末裔であって、しかも先祖代代、額に汗してこの地を耕してきた百姓である。

ということに屈折した誇りを持っていた父親は、子供が士農工商の最下位にある賤しい商人ごときの出世譚に興味を示すことを許さなかった。

嘉之の興味は、父親の禁止によって、よけいに強められたのかも知れない。いかに誇り高き家柄であるとはいえ、実際の生活は、掘立小屋同然の家に住んでいて、収穫の大半は年貢に取上げられ、食

う米にも不自由している百姓の暮しなのである。

かれが商人の出世譚を聞く相手は、もっぱら読み書き算盤を習っていた寺の恭順和尚だった。

2

「和尚様、また亀屋の話ば教えて呉ろじゃ」

その日の手習いが終わったあとで、嘉之はいつものように恭順和尚に頼んだ。

「よし、よし」

恭順は頷いた。浄土真宗の僧であるかれは、六十をすぎたいまも娑婆っ氣を失わず、土地の商人の成功と失敗を語っては、法の因果を説くのが大好きだった。

亀屋というのは、五所川原きつての富豪であった。先祖は越前の敦賀からやって来て、最初はこのあたりで小間物の行商をやっていたのだが、上方からの荷物が船で着く西海岸の鰺ヶ沢港と、そこから五里以上離れている五所川原のあいだを絶えず往復し、つねに新しい品物を売り歩くことでまず成功をおさめ、蓄えた金で着着と土地をふやし、さらに造り酒屋を始めて、莫大な身上を築き上げたのである。

その身代がどれほどのものであったのかについては、天明三年の大飢饉のときに、翌年の八月まで、五所川原、喰川、平井、柏原四か村の百姓千七百人に、一日米一合ずつを配って助けた……というい

い伝えがあつたほどだった。こうしたことを伝える恭順和尚の話には、当然、

「亀屋は、こらほどの慈悲心があつたから、きょうまで榮えてるんだ」

という説教がつくのである。

「ふーん……」

嘉之は説教にはあまり興味を示さなかった。

「本当だド」恭順は声を励ました。「おめが生まれるすこしまえの天保七、八年の飢饉けがづのときにも、亀屋の五代目は、村の者百六十人ば引受けて、ちゃんと飯食ままかへで世話したんだ」

「ふーん……」

と、またすぐには領かず、子供ながらもすこぶる数に聡い嘉之は、恭順の話に対する疑問を口にした。「したども、まえの飢饉けがづのときに助けたのが千七百人で、こんどは百六十人づのは、随分ずんぶん数が減つたもんだな」

「……………」

「まえに千七百人もの百姓を、一年の余も助けたづのは、すこし話が大きすぎるんでへんな？」

「そすたごとはねえ」自分の話を疑われて、恭順は不機嫌になった。「われは、ちゃんと人がら聞いだことがある」

「だれがら？」

「だれがらって……」

「天明三年の飢饉^{けがっ}っていえば、いまから何年くらいまえの話です？」

「ざっと七十年くらいまえのことだな」

「そのあいだに、話が大きくなったんでねえべがな」

嘉之は大人のような顔をして首を傾げた。

「なして、そうおもうんだ」

「ンだって、まえに助けたのが千七百人。それがら亀屋の身上は、まえよりうって大きくなってるのに、こないだ助けたのが、たったの百六十人づんだば、あんまり数が違いすぎるもの」

「いや、それは……」

恭順は一瞬答えに詰まったが、すぐにおもいついて、それにはこすたことがあったんだね……と言葉を続けた。

「これも、おめの生まれるまえの話だけれども、利助^{りすけ}づ名前の大した相撲の強い若者^{わかし}がいたんだ」

「相撲……？」そのことといまの話と、何の関係がある、という顔を嘉之はした。

「そんだ。この男は亀屋さ仕えて働いでらんだけれども、江戸さ出て行って、柏戸宗五郎の弟子になつて相撲取りになったんだ」

「……………」

「これが、なんもかんも相撲の強い男でせ。やがて親方の柏戸づ名前ば貰って、大関にまで出世した」

「ほう……大すたもんだな」

こんどは素朴な感嘆の色を眼に浮べた。

「そだせ。大関づのは、その上がねえづごとだからな。利助は日本一の相撲取りになったわけだ。さあ、それ聞いて亀屋の旦那様は喜んだのなんのって、利助と弟子ば吉原さ呼ばって、大門ば三日三晩閉めきって豪遊したづんだ」

「吉原って、何だ」

「それは、おめは判らなくてもいい」

「なして」

「なしても」恭順和尚は鼻白んで「子供^{わらし}の行ぐどごではねえ」

「わらしの行ぐどごでなくても、吉原って、何するところだ」

嘉之は執拗に訊ねた。疑いが解けるまで、問いをやめない性質であることを知っていた恭順は、

「われも行ったごとがねえがら、何をするところだかよく知らねえけんども、とにかく綺麗^{おなご}だだ女子が、いっぺえいるどごだづ話だ。したどごでハア、柏戸も有頂天になつてしまつて、亀屋の旦那様ば乗せた駕籠を一人で担いで、吉原中駈^はけで歩^{あき}いたづんだ」

「おそろしねえ力持ちだな」

「ソンド。ところが、それが大変だ評判になつてせ。町人の分際で、そすた派手な遊びをするのは怪しからん、づわげで、亀屋の五代目は殿様に隠居させられですまつたんだ。ソのだがら、このまえの飢饉けがづのときも、あまり派手な振舞いは、でぎなくてあつたわけせ。つまり……」

と、恭順和尚は面持を改めて教訓をつけ加えた。「なんぼ銭じえンコを儲げでも、調子さ乗れば駄目まいめ、づごとだ」

「しかし……」

嘉之は新たな疑問を呈した。「亀屋は、そすた失敗しじやうをしても、いまもってまだ栄えて続いでるのは、どういうわけだ。和尚様はいつも、因果応報づごとをいうけんども、それだば因果応報の理屈から、はずれるんでへんガ？」

「それはせ……」

恭順はふたたび鼻白んだ。町人の分に余る振舞いを見ても、領主の津軽家が、せいぜい隠居を申しつける程度の処分しかできなかったのは、おそらく亀屋に厩大な借入れをしていたからだろう。だがそれは、まだ年端もいかぬ子供に説明できることではない……。言葉に窮していた恭順に、

「まえに和尚様は、亀屋は殿様さ一万石もの米を貸したとがある、づ話をしたとがあつたけんども……」と、嘉之は聞いた。「殿様はそれで亀屋を、あまり強く押さえられなくてあつたんでへん